

第二章 真の意味で主の祈りを唱える

われわれの近隣には、各地からの移住者が集まり、人口稠密居住区域を形成している。彼らは、よりよい生活を求め、あるいは何とか生活の手がかりをつかもうと、故郷を離れ都会へと流れ込んできた人びとである。働き口を見つけ次第彼らは働いた。骨身を削るようにして働いた。しかし今もって、彼らの手には何も残ってはいない。この落差は彼らが雇い主にもうけさせてやったということにある。

彼らが生き続けようとするれば、どんな方法に頼ることになるであろうか？ 第一には、できる限り出費をおさえることである。彼らは大抵は豆を食べる。あるいは手に入れられれば、米やシーリアル（コーンフレークなどの穀物食品）、鶏卵などを、そして時おり、わずかばかりの鶏肉を口に入れる。その他の肉類は、彼らとはほとんど無縁の存在である。衣類や靴を購入するといった機会もほとんどない。ごく稀に少々値のはる商品を買うことがあっても、割賦販売による購入である。そうしても、彼らの周囲には豊かさのかけらも存在しな

い。彼らは、以前より身を粉にして働かなければならない。そして彼らは、父親、母親、子どもたち、と一家総出で働きに出る。子育ては運任せとなり、幼児たちは親の愛情も世話も知らずに成長する。

ここでの生活は厳しく、困難をきわめている。真の家庭生活など、存在しないも同然である。この区域の住人たちは、粗末なアパートに、あるいは掘っ立て小屋に、折り重なるようにして居住している。一部屋に五人の人間が住み、小さなあばら屋に二家族が寝起きするというケースもめずらしくはない。こんな劣悪な居住環境にあつては、清潔なごみ処理など望むべくもなく、その捨て場所さえ定められてはいない。生活用水は近くの運河、川から得られているが、そこにはあらゆる汚物、汚水が流れ込んでいる。清潔で汚染されない水などどこにもなく、入手は不可能である。こうした環境のもとで、誰が健康でいられるであろうか？ 住人たちは、食べるものも食べないで重労働に従事し、この汚濁の中で家畜のような生活を強いられている。誰がこの中で、抵抗力を持ち続けることができるであろうか？ 人びとは、貧苦に根ざすあらゆる病いにさらされ、かろうじて生きている。彼らを襲うのは、寄生虫であり、栄養不良であり、脱水症状であり、結核、肺炎、脳膜炎等々である。一つの病いをきっかけとして、次の病いがこれに加わり、その結果として現れるのは、短命である。

われわれはまさに、放置され、離散した有機体の集合である。人間、市民といったレベルの存在ではない。社会生活など名ばかりである。疲弊した経済に支援の手は伸びず、賃金の上昇を求めて闘う者も、物価の高騰を制御する者も、腐敗した農産物をチェックする者も、ここには居ない。これがわれわれの現実である。困難で醜悪、どうにもやりきれない。

サンパウロ郊外、キリスト教基礎共同体サンタ・マルガリータからの報告

SEDOC 11 (1978): 345—348

祈りは、人間がおこなう最初の行為ではない。祈りの前に、人は、自分の実存を揺さぶる衝撃的な経験をしている。こうした衝撃があつて、嘆願の形にしる、あるいは感謝の形、礼拝の形にしる、祈りが生まれるのである。⁽⁶⁾

イエスがわれわれに唱えるようにと教えた祈りである主の祈りと、先に述べた祈りとは、何の違いもない。主の祈りは、イエス自身の深い体験、彼のことばと行為に置き換えられた体験を抜きにしては、決して理解できない祈りである。主の祈りとはまさに、三世紀の聖書釈義にテルトゥリアヌスが書き残しているように、完全なる福音の要約なのである。⁽⁷⁾では、主の祈りとイエスの良き知らせ（福音）を形成する力となったのは、どんな「実存的衝撃」だったのであろうか？

切り裂かれた世界の血管、それは被造物の苦しみ（ロマ八22）

われわれが周囲を見渡すなら、あまりに露骨でむき出しの矛盾に接し、激しい衝撃を受ける。すなわち、至るところに疑う余地のない善、美、恵みを見出す反面、この世と人間を破壊する不正、害悪、硬直性にも、いや応なく出会うのである。われわれの人生の行く手には、次々と苦しみが現れる。現実には悲劇的なものであり、われわれの眼にたびたび涙をあふれさせる。人間性とは攻撃的なものであり、そこに働く基本的法則は、「俺が生きるか、さもなくばお前がか」というものである。天変地異、自然の激変、宇宙の混乱、無秩序化は、人間がその実現を望み、願うあらゆるものの均衡状態、平安の敵であり、脅威である。

世界はいま、あらゆる血管から血を流している。そしてその流れ出る血は、止まることがない。聖パウロは、「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」（ロマ八22）と述べている。被造物は決して己れの主人なのではなく、途方もない力、暴威に翻弄される存在として生み出されている。われわれは、どんなに想像をたくましくしても、殉教がなく、大虐殺がなく、集団的犯罪のない社会を思い

描くことは不可能である。被造物は神の平和の虹の下になど生きてはいない。さまざまな偶像があらゆる場所に立ち現われ、真の、生きた神に代わって自分を崇拜するよう、われわれに要求している。

わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。だれがわたしを救ってくれる
のでしょうか？（ロマ七24）

人間のレベルで体験される矛盾は、さらに激しく、苛烈である。ヨブの叫びは一つの世代から次の世代へと、天に向かって駆けのぼり、すべての者の耳に達している。また、だれもが、世界との、労働との、他の人間との、愛との、また正義との関係が、いかなる形で引き裂かれるようになったかを理解することができる。この断絶は、社会構造に亀裂を入れるだけでなく、人間の心をも別々の断片に切り分け、孤立させている。「わたしは自分の望む善はおこなわず、望まない悪をおこなっている」（ロマ七19）。

支配したい渴きは、満足することがなく、破壊本能は尽きることがない。そして犠牲となつた者たちの数は、これで十分ということがない。日々の生活、暮らしすら、生の不条理、不可

解、残酷さの投げかける影から逃れることはできない。苦悩の歴史の最終章は、まだ書き終えられてはいないのである。

御子であるキリストでさえも、「激しい叫び声をあげ、涙を流し」（ヘブ五7）、「苦しみもだえ」（ルカ二二44）、そして「多くの苦しみによって従順を学ばれた」（ヘブ五8）。われわれは、彼が天に向かって発したことばに、神から見放されたとする思いを確かに聞きとれることができる。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マコ一五34）。パウロによる嘆きの問いは、人間の悲劇の重さをしっかりと捕えている。彼は「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。……だれがわたしを救ってくれるでしょうか？」（ロマ七24）と慨嘆している。

被造物は切に待ち望んでいます（ロマ八19）

この醜く、すさまじい状況に対して、われわれの三つの選択肢からいずれかを選び、対処することになる。すなわち、反抗するか、あきらめるか、あるいはひたすら希望を抱き続けるか、のいずれかである。

反抗

この世の悲劇的狀況に憤慨し、いらだち、天に向かってこぶしを振り上げる人びとがいる。神などは存在しないし、これまでも存在したことなどない！ と叫び、われわれには、彼がわれわれに尋ねる以上の疑問、問いが山ほどある！ と激しく迫る。現代人の多くは無神論を標榜し、胸の内に神に対する怒り、攻撃的感情をたぎらせている。⁽⁸⁾もし正義にもとる行為をおこなったとして被告席に坐らされる犯罪人がいるとすれば、それは神である、と彼らは言う。神は全能である。ゆえにこどもたちを苦しみから救い上げるなど、造作もないことのはずである。にもかかわらず、神は傍観するばかりである。彼はわれわれを拷問の苦しみに突き落とし、暴力による死にいたらしめる、この行為は、恥ずべき犯罪ではないのか。

また、他の人間は次のように叫ぶ。無垢の被造物が苦しまなければならないような創造、それをおこなった神を、自分は金輪際容認することはできない。彼は、恐ろしい犠牲を要求するモレク神、すなわち人間の涙を見て喜び、切りさいなまれた肉をむさぼり、剣による処刑を生きがいとする存在でしかない。そんな神など絶対に許されるべきではない！

二世紀の異端者マルキオンは、現代のわれわれが目あたりにするのと同様の悲劇、人びとの悲惨な姿を見て、神には愛が欠如していると論じ、そうした神を愛するのは不可能だと主張

し、結局、神は誰の父でもないのだと断言した。また二〇世紀の著名なイギリスの歴史学者、アーノルド・トインビーは、「主の祈りの不快な調子」を非難するとともに、次のように書いている。「神が善であり、同時に全能であるというのは、不可能なことである。この二つの要素は、神の本性として選択されるべき二者択一の要素であり、両者は相互に排他的な概念なのである。われわれは、両者のいずれかを選ばなければならない⁽⁹⁾」。

愛としての神の存在と、この世のいたるところに見られる不正義とを論理的に和解させ、両者の間に折り合いをつけさせようとする試みは、ヨブの時代から一貫しておこなわれてきた。特に聖アウグスティヌス、ライプニッツといった天才たちが、苦しみ、不正の何たるかを説明し、神の汚名をすぐ論理を構築しようと精魂を傾けて努力したにもかかわらず、今なお人間の苦悩、重荷は消え去ってはいない。苦しみ、苦悩の何たるかを理解することと、それを除去することとは、別次元の事柄である。それはちやうど、料理の作り方を入念に聞かされても、飢えは少しもいやされないのと同じである。

われわれは、苦しみの意味を説明しようとする「友人たち」に対してヨブが示すいらだちをよく理解することができる。「あなたたちは皆、偽りの薬を塗る、役に立たない医者だ。どうか黙ってくれ。黙ることがあなたたちの知恵を示す。……わたしが話しかけたいのは全能者なのだ。わたしは神に向かって申し立てたい」(ヨブ一三四～五、三)。

あきらめ

次に、抽象的なあきらめに身を任せる人びとがいる。現実には善と悪が混在する世界である、あるいは、宇宙には神と悪魔が同時に存在するのだと、物分かりよく受け入れてしまふ。そして、われわれは彼らの気まぐれな態度によって右へ左へとそよぐ存在、あるいは「最高の実在」にそなわる矛盾の影響を直接的に受ける被害者、善と悪が覇権を求めて戦う戦場の役割を果たすのみの存在である、と考えるのである。

また、次のように考える人びともいる。この世には、善の原則と悪の原則という二つの対立する原則があり、両者は永遠にせめぎ合うのである、と。こうした状況のもとで人間が生きる方法を求めるとすれば、その道は悪に打ち勝とうとするところではなく、善と悪の間にバランスが保たれるよう、あるいは完全と不完全の間に均衡が保たれるよう努力を払うところにある。人間は希望を持たずに生きられるよう自らを慣らしていく必要がある、と彼らは言う。

さらには、宗教的、倫理的にもっともらしいことを言い並べ、そこに逃げ込んで、あきらめに終始する人びとも存在する。彼らの主張はおおむね次のようなことである。神にあるのは光だけであり、暗黒は存在しない。悪や不正は人間によっておこなわれる。人間は、運命や抵抗不能の誘惑の犠牲者、いけにえなのではなく、自由の体現者であり、それゆえ自らの自由意志

によって打ちのめされることもある存在なのである。創世記第三章に人間の墮落の物語が記されているが、ここで強調されているのは、人間は自らの責任を自覚しなければならぬということである。人間がこの自由をほしいままにし、乱用すれば、結局自らが落とし穴にはまり、自由を失ってしまうことになる。現にわれわれは、みながまずまずの生活水準にある歴史、仲良く暮らせる歴史を生み出し得ないでいる。人間は、もっと謙虚にならなければいけないし、相互に寛容になれるよう自らを鍛練していかなければならない。人間はすべて罪びとなのであることを認めなければならない。

シラ書（集会の書）には、あきらめ、忍従した、禁欲的人物の典型が登場する。ここには人間の生活について、あるいは人間の将来についての夢、幻想は皆無である。⁽¹⁰⁾彼は、あらゆる世代の読者に、次のように呼びかけている。「主に寄りすがり、決して離れるな。……身にふりかかる艱難は、すべて甘受せよ。たとえ屈辱を受けても、我慢せよ」（シラ二三、4）。神はつねに遠くにいるわけではない。抑圧された者につねに冷淡であるわけではない。そして、彼らを救い、自由にしようと決意したのである（出三七、8）。貧しい者によって吐かれた呪いのことばは、神によって聞き届けられる（シラ四六）。

新約聖書の神は、苦しむ者と連帯する存在として描かれている。メシアはまさに、その「苦しむ人」であり、「われわれの苦しみを担い」、「苦しみにによって謙遜を知った」（イザ五三三、

4. マタ八17) しもべ、神の托身であつた。「御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです」(ヘブ二18)。この連帯によって人間の苦しみが消えるわけではない。しかしこれによって、苦しみ悩む人びとの間に、連帯感、仲間意識が醸成される。あきらめ、忍従も可能なこととなり、絶望に陥るのも回避される。すべて、偉大で、大きな力を持つお方、同時に苦しみ懊悩されたお方との霊的交流を通じて、得られるものである(コロ一24、ロマ八17、一ペト四13)。しかし、それでもなお、傷口は開いたままである。そして血が流れ続ける。われわれは再び問うしかない。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。だれがわたしを救ってくれるのでしょうか?」(ロマ七24)。

ひたすらなる希望

そして、ひたすら希望を抱き続ける一群の人びとが存在する。彼らの考え方も、他の人びとに劣らず現実的である。というのも彼らにとっても、この世は涙のかわくことのない世界だからである。彼らの生は、個人的な間違いによって苦しみに突き落とされ、あるいは歴史の不条理によつてもてあそばれ、翻弄される。人間の歴史は苦しみの記録であると呼んでもさしつかえないが、それでもこの一群の人びとは、人間はきつと勝利を握ると思いつけている。歴史の展開後の最頂点で、この世の基礎になるのは混沌ではなく、コスモスであり、すべてのものの

分離ではなく、愛に基く集合である。被造物は、それが被造物であるがゆえに悪なのではなく、人間の自由のはきちがえによって汚され、傷つけられたために悲しむべき姿をさらすことになったのである——。こう考えながら、彼らは、この世の闇を吹き払う完全な光の出現を願ひ、希望する。そして聖書のことばの端々に、それが約束となつてゐることを読みとり、支えとしてゐる。「彼らは、剣を打ち直して鋤^{すき}とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かつて剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザ二4、ミカ四3)、「地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく火に投げ込まれ、焼き尽くされた」(イザ九4)、というのも「(彼は)弱い人のために正当な裁きをおこない、この地の貧しい人を公平に弁護する」からである(イザ一4)。そして、人間と自然、他の動物との間に、和解が成立するであろう(イザ一一6-9)。もはや「彼らは、飢えることも渴くこともなく」、宇宙の混乱、騒動を見ることもない(黙七16)。というのも「神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。なぜなら古い秩序は過ぎ去ったからである」(黙二一3、4)。そして、新しい天と新しい地が存在することになる(黙二一1)。

これは、ユートピアを表わすことば、希望のことばである。この世の陰うつな体験に照らすならこの解放された世界は、現実と対極のところにある憧憬の世界である。それでもこの憧憬

は生き続け、消えることがない。このふくらんだ期待は、残酷で惨めな出来事以上に現実的である。こうしたところに生きる精神は、つねに、絶望や無力感に対して強い抵抗力を示す。あらゆる時代の預言者は、希望を擁護してラッパを吹きならす騎兵であり、より良き明日を告げるために地平線からのぼる巨きな星なのである。

解決の道は未来にある。われわれは希望によつてのみ、救われるのである（ロマ八24）。さらに悪い時が続いてゆく。そしてわれわれの恥辱も……。ああ、主よ、あとどれほど続くのでしょうか？

暗闇に住む民は大きな光を見た（マタ四16）

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マコ一15）——この背景と対照して、われわれは、イエスの出現と彼の福音宣言を理解しなければならない。神はすでに介入、仲裁を決意されている。このいまわしい状況に終止符を打ち、新しい秩序を発足させた——と。しかし神は、未来の事がらを告げているだけではない。現在のことも語っておられる。「この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ四21）。神の

国は、歴史上のイエスの中心的メッセージとなっている。この王国がどんな国であるか、具体的に詳細に説明されているわけではないが、決してもったいぶった、思わせぶりの、空疎なこ
とばだけのものではない。その世界は、すべての人びとに喜びをもたらすし、すでにわれわれ
の心の中に存在している。そしてその全貌が姿を現わす日も、すぐそこまで来ているのであ
る。神の国の出現によって、この世のすべてが変わり、改善される。すなわち目の見えない者
の目が開き、足の萎えた人間が、立って歩くようになる。死者がよみがえり、罪は赦される。
そして貧しい者、抑圧された者、正義から見放された者たちに、特別の配慮と恵みが施され
る。われわれにできる最善のことは、生き方を変え、新しい状況に適応することである。神の
国は機械的に到来するわけではない。世界に広がる悲劇的現象を解き明かす議論のようなもの
ではなく、それは、行動であり、変化であり、新しい実践である。

このように「神の国」という言い方は、表現上の一つの工夫ということができる。すなわち
神を敬慕するあまり、その名をあえて口にするのを避けたユダヤ人たちが神の名を適切に言
い表わす表現として、つまり神の同義語として、この言い方を案出したのである。それゆえに
「主は代々限りなく統べ治められる」(出一五18)という言い方の意味するところも、神は唯
一、歴史の主として出現するということであり、乱れた秩序は回復されずにはおかまいとい
うこと、同胞たちを見下し軽蔑するような強者権力者たちは退けられずにはおかまいとい

と、そして見下げられ、面目を失わされた人びとが救い出され、最後の敵、死が滅ぼされる（一コリ一五26）ということである。

神がこのような形で被造物を自由にし、解放されるためには、人間は単なる傍観者として事態の推移を眺めるのではなく、積極的に参加しなければならない。さもないければ神の国は、非人間的で負担を感じるようなものになるだろう。誰にもわかる通り、こうした世界は、われわれの待ち望む国ではない。神が介入し、われわれが回心し、そのように世界に働きかけるとき、この世界は、まさに神の国へと変貌する。ゆえにこの王国は、与えられるものであると同時に、使命として獲得しなければならぬものであり、贈物であると同時に勝ち取られるものであり、現在のものであると同時に未来のもの、祝福であると同時に約束なのである。⁽¹¹⁾ 希望は、苦悩の心の内部で再生される。「暗闇に住む民は大きな光を見た」（マタ四16）が、この光とはイエス自身のことであり、擬人化された王国のことである。イエスがいらつしやるところに、神の王国もまた、姿をあらわすのである。

完全な王国の出現は間近である。イエスは、すべてのものの完全な再生、新生が間もなくおこなわれるという同時代人の確信を共有し、信じている。しかし彼の関心は、それがいつ、どのような形で出現するかという点についてではなく、むしろその出現に「目をこらす」ことに向けられている。すなわち神の国は、まるで盗人のように姿を現わすので注意しなければなら

ないのである。⁽¹²⁾ それに神の国は、現世のこの世界の対極に構築されるものである。その王国はイエスと共に姿を現わすが、一方ではこの世のおぞましい事態もなお持続される。かくして、被造物の混乱、悪しき事態と、完全無欠な新天地との間の基本的な相違、矛盾が、少なくともしばらくのあいだ、続いていくことになる。

イエスの時代に著わされた黙示録、預言の書には、この緊張と期待感が深い体験として浸み込んでいる。こうした体験をもち、それを記録した人びとの精神の地平を理解することなしに、歴史上のイエスを理解しようとしても、あるいは彼の宣言の省略されたことばを理解しようとしても、そして彼が喚起した希望を、その前提としてある時代の切迫性を、また最後の決定的瞬間にそなえて必要とされる根源的回心を理解しようとしても、困難をきわめるだけとなる。

約束された神の国の場合同様、全世界的に繰り広げられている現実改善のプロセス、現実を再構築しようとする草の根の流れを受け入れるには、信仰が必要である。イエスはこのことを、何度も明確に述べている。この福音を、良き知らせを信じるように、と(マコ一15、マタ一20)。ユートピア(非存在の場所)がトピア(どこかに存在する場所)に変わる、すなわち現実が花園に生まれ変わるのは、頭で考えるほど明確で、理解しやすいことではない。聖ペトロによる書簡の第二には、イエスの教えを聞いて不満を述べる者たちの声が何度となくとり

上げられている。「父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないうではないか」(二ペト三4)と彼らは抗議する。しかし、人びとに夢想家の空しい約束を与えるのが正しいことなのであるか？　さまざまな矛盾をはらんだ現実をそのまま受け入れることこそ、いっそう意味のあることであり、大人のおこなうべき事柄なのではあるまいか？　現実には汚濁があり、悪や苦悩が存在するが、それでも希望を抱き続ける人びとが確実に存在する。ヨブが語ったように、「神はわたしを殺されるかもしれない。だが、ただ待つてはいられない。わたしの道を神の前に申し立てよう」(ヨブ二三15)と多くの人びとが考えている。人の心が永遠にあざむかれることはありえない。その証拠として、イエスの復活をあげることができる。ここにわれわれは、新しい天地が現れ、新しいアダムが出現する(一コリ一五45)最初の確かなしるしを見ることができる。ここにおいて、完全な解放がおこなわれるのである！

イエスと聖霊に教えられ、わたしたちは「アッバ、父よ」

(ガラ四6)と唱えます

先に述べたように、実存的な衝撃が主の祈り、すなわちキリストが使徒たちに教えた祈りの根底を成している。ここにわれわれは、イエスの体験のまさに中心が結晶化され、彼の教えの基本的目標があらわれているのを見い出す。この体験は、終末は間近である、すなわちこの悪の世界の終りが間近いという認識に集約される⁽¹³⁾。しかしそこから送り出されるメッセージは、洗礼者ヨハネの裁きと懲罰のメッセージではなく、最後には神の国が完成されるということに発する喜びのメッセージである。

神の国が実現されるまで、われわれは転換期に生きることになる。古い世界が終わり、新しい世界が始まるまで、短い待ち期間があるのである。この期間は、運命の分かれ目であり、誘惑の時であり、そして決断の時である。すべてが問われ、賭けられている。われわれは何にすがれるだろうか？ どうしたらそれに適切に備えることが出来るだろうか？

これが、主の祈りのわく組みとなる歴史的関連事象である。イエスの祈りの当初の意味を求め、所与の資料を再構成しようとする場合には、まずこの切迫した状況を出発点に据える必要がある。そこで、主の祈りはいかなる時に発せられたのか、その歴史と構造を詳しく吟味してみたいと思う⁽¹⁴⁾。

主の祈りは、二つの形態で、今日まで残されている。すなわちマタイによる福音書に比較的長い形（六9〜13）のものが記され、ルカによる福音書にそれより短い形のもの（一一2〜

4) が記されている。以下に二つの主の祈りを並列してみる。

マタイ

天におられるわたしたちの父よ、

御名が崇められますように。

御国が来ますように。

御心が行われますように、

天におけるように地の上にも。

わたしたちに必要な糧を今日与えてください。^④

わたしたちの負い目を赦してください。

わたしたちも自分に負い目のある人を

赦しましたように。

わたしたちを誘惑に遭わせず、

悪い者から救ってください。^⑤

③(あるいは) 明日の糧を

①(あるいは) 悪から

ルカ

父よ、^⑥

御名が崇められますように。

御国が来ますように。

わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。^④

わたしたちの罪を赦してください、

わたしたちも自分に負い目のある人を

皆赦しますから。

わたしたちを誘惑に遭わせないでください。^⑤

③(あるいは) 天におられるわたしたちの父よ

④(あるいは) 明日の糧を

二つの福音書が現在の形のものに整えられたのは、紀元七五〜八五年のことであった。そこ

で、誰もが抱く疑問であるが、主の祈りはなぜ、この二つの形で伝えられることになったのであろうか？ イエスはこの教えを二つのものとして、別々の機会に述べられたのであろうか？ 専門家によると、福音書の著者たちが今日われわれに残しているものは、著者それぞれの生活の場、彼らの共同体において見出された形のものであるという⁽¹⁵⁾。

歴史的に言うなら主の祈りの現在の形は、単純に、元のギリシア語のテキストから、元のアラム語テキストへと翻訳しなおすことが出来ない。つまり、イエスが語った厳密な言葉ではない⁽¹⁶⁾。イエスから与えられたことばは、初期の種々のキリスト教共同体の中で、さまざまに消化され、吸収されていったと考えるのが自然のようである。そのことは、『デイダケー』が証明している⁽¹⁷⁾。イエスご自身によって与えられた当時のその祈りがどんなものであったかについて、知るすべはない。われわれが知ることのできるのは、これらの二つの訳文のみである。

そこで、この二種の記述のうち、どちらが先に作成されたものであり、どちらが元のものにより近いのであろうか？ ルカによる記述は短く、より長い形のマタイによる記述に、そのすべてが含まれている。著名な聖書研究者であるヨアヒム・エレミアスは、典札に関するテキストの伝承を支配する法則に従うならと断った上で、次のように証言している。「長短二つの表現があり、短い方が完全に長い方に包含されているという場合には、短い方がオリジナルと考えるのがふつうである⁽¹⁸⁾」。この理論を援用すると、ルカによる表現の方がオリジナルにいつそ

う近いことばということになる。

マタイとルカを仔細に比べてみると、前後の状況に相違が見られ、これが二つの表現の違いを理解するのに一つの手がかりを与えてくれる。いずれのことばも、祈りに関わる教えとの関連で提示されているという面では共通点を持つているのであるが、主の祈りが語られるマタイによる福音書第六章6～15節は、祈りに関するカテケシス（教理教育）であり、おそらく新参の信仰者のために語られたことばであると思われる（「パリサイ人の虚飾、あるいは異邦人のくどさを以って祈ってはならない。そして、あなたが赦されたいと願うなら、赦しなさい」）。ルカによる福音書十一章1～13節にも、カテケシスを見出すことができるが、ここでは書き方の手法が異なっている。マタイの福音書が、祈りの仕方をすでに知っており、正しく祈るにはどうすればよいかを修得しなければならないユダヤ人に向けて語られているのに対し、ルカの教えは、祈ることを知らない、それゆえに祈りの生活に導かれる必要のある異邦人に向けて、なされている。ということから、マタイは儀式重視の語りをおこない、いきおい全体を引き伸ばして詳しく語ろうとする傾向をもち、他方ルカは、短かく、教えのエッセンスを確実にわからせようとする傾向を持ったとしても、さして不思議はあるまい。しかしいずれの表現も、リズムがあり、押韻がなされ、詩の形式が取り入れられた上で、完成されているということは、これが声に出して、集団で唱えられるべき教えであるということの一つの証左となろう。その

他の相違点については、それぞれの表現を分析する際に、また触れることにする。

主の祈りの起源は、明らかにユダヤ教に求めることができる。しかしイエスの祈りは、きわめて形式的で、簡潔であり、「シエモネー・エスレー」(一九の祝福からなるユダヤ教の祈禱)や「カディツシュ」(祝祭の最後に唱えられる祈り)、その他ユダヤ教ラビたちによる各種の祈りに見られる修辭は、払拭されている⁽¹⁹⁾。

ルカによる福音書の問題の個所には、主の祈りがどんないきさつで唱えられるようになったか、その由来が示されている。「イエスはある所で祈っておられた。祈りが終ると、弟子の一人がイエスに、『主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください』と言った。そこで、イエスは言われた。『祈るときには、こう言いなさい。父よ……』」(ルカ一112)。

ここに洗礼者ヨハネに対する言及が見られるが、ここからルカの福音書で語られる内容の歴史的背景をうかがうことが可能となる。ここに登場する「わたしたちにも祈りを教えてください」という要請のことばは、「わたしたちにあなたの教えをかいつまんで与えてください」と言うに等しい。またわれわれは、イエスの時代のすべての宗教集団が、それぞれ独自の祈りの型をもっていたことを知っている⁽²⁰⁾。祈りというのは本来、一定の集団を團結させ、その構成メンバーに帰属意識を持たせる、ある種の綱領としての役割、機能をそなえている。それゆえに、イエスの祈りを唱える小グループは、自分たちをイエスによって作られ

た、現世の終末を信じる完全な共同体であると感じていた。⁽²¹⁾ 結局イエスの祈りは、彼の目的、彼の使命の真髄を示すものと見てまず間違いはない。そこでは、御父への言及がなされ——それは、歴史的イエスの心の奥からの、親しみを込めた祈願であつた——そして神の国の到来への言及がなされ、生命として生きるために必要とされる物（パン、糧）、あるいは社会的存在として生きるために必要とされるもの（赦し、壊れた関係の修復）、を与えてくださる神の意志、御心への言及がなされ、そして、誘惑の危険への言及がなされている。

マタイの表現では、祈りの形式としての主の祈りの重要性が、さらに明確に示されている。すなわちイエスは、主の祈りの行為を、施し（六1-4）や断食（六16-18）といった他の敬神行為、祈りの行為に関する議論にからめて述べ、その上で両者をはっきり区別する言い方を採用することによって、前者の重要性を強調している。

また、この主の祈りの構造を検討するなら、だれもがすぐに、ここに逆の方向への二つの動きを認めることができる。すなわち、その一は、御父——その神聖さ、御国、御心という天に向かう動きであり、いまひとつは、糧、赦し、誘惑、悪と、地上に向かう動きである。三つの祈願が天に向かつてなされ、三つの願いが地上のためになされている。信仰には二つの眼がある。一つの眼は、神を見上げ、そして神の光を観想する。いま一つの眼は、地上に転じ、暗やみの悲劇を認識するわけである。われわれは一方で、上方に（すなわち神の方向に）向かう内

なる人（霊）の衝動を感じとり、今一方で、われわれを下方に（すなわち地上に）かがませる外なる人（肉）の重さを体験する。

すべての現実が、その立派さも、その暗さも含めて、神の前に横たえられている。主の祈りでは、天に向かう（すなわち天におられる御父をめざす）無限の熱望と、地上の源（日々の糧、食べ物）を求める願いとの両方が、この世を代表するものとして神に向かい、捧げられているのである。

初代教会においては、主の祈りというのは「秘密の綱紀」に属するものであった。キリストの神秘に触れた者という限られた人びとのための祈りだったのである。ごく最近まで崇敬と敬慕の念に満ち満ちた導入の言葉「あなたの教えにさとされ、聖なる制度に導かれ、わたしたちはあえて呼びかけます。われらの御父、と」（第二バチカン公会議で改訂される以前のミサ典書より）が用いられていたというのも、このことによって理解できるのである。われわれは、主の祈りを通じて、イエスにより弟子たちに伝えられた「秘密」と対面することになる。主がわれわれに教えられたこの祈りは、何らかの形式のもとに、あるいは一定の決められた態度のもとにただ祈るということであってはならない。その根底に、この世界のすべての悲劇に対する認識がなければならない。われわれが歴史の受難の中で苦しむとき、その祈りはわれわれに解放を約束するのである。

主の祈りを祈るためには、信仰、希望、愛の行為が求められる。テルトゥリアヌスも述べているように、この祈りを祈るに際しては、神の沈黙があり、隔てとよそよそしさがあり、われわれを圧倒する苦しみの環境があったとしても、われわれは、御父としての神を信じることを述べなければならない。⁽²²⁾ 神は、慈悲深い父である。われわれの周囲を見まわし、広く世界に目を向けるなら、御父の思いやりを証明し、確認することはできない。それでもわれわれは、神を信頼する。主の祈りとはまた、希望の行為でもある。御国が来ますように、御心が永遠に行われますように！ われわれは、御父がことごとく涙をぬぐって下さり、被造物の構成、仕組みを組み直されると、強く期待している。その期待と希望があつてこそ、神の平安がわれわれの上に輝くことになる。そしてまた、主の祈りとは、愛の行為でもある。われわれは神を、御父と呼び、さらに親しみを込めて、われらの父と呼びかける。ここには愛の暖かさとしみひたりの全てがこめられている。イエスが用いる「アッバ」ということばは「お父さん」「お父ちゃん」「大好きなお父さん」といった意味なのである！

おそらくわれわれには、イエスと同じようなくだけた呼び方で神に語りかける勇氣はない。しかし、われわれの心の中に吹き込まれたイエスの霊は、われわれになり代わり、「アッバ、父よ」（ガラ4:6、ロマ8:15）と呼びかけ、祈りのことばを唱える。

われわれはイエスと共に終末の時に向けて共同体を作るがゆえに、また神の霊が「私たちの

父よ！」と祈るよう働きかけるがゆえに、御子イエスにあつて、われわれは父なる神の息子であり娘であることがわかるのである。